

Review

糖尿病のスティグマと職場の障壁を取り除く工夫 ～療養・就労両立支援指導料の活用～

中部ろうさい病院糖尿病・内分泌内科/治療就労両立支援センター両立支援部

中島英太郎

はじめに

数年前より米国糖尿病学会を中心に糖尿病に関する偏見（スティグマ）が、糖尿病診療上で大きな問題ととらえられるようになり、それに対する患者の擁護（アドボカシー）活動が注目されている。2018年ごろよりわが国でもアドボカシー活動の必要性が認識され、日本糖尿病学会および日本糖尿病協会が合同でアドボカシー委員会を設立（2019年11月）しアドボカシー・啓発活動が開始されている。スティグマには、糖尿病を理由に保育園や幼稚園の入園、小学校の入学、就職、結婚、生命保険の加入などで不利益を被る「社会的スティグマ」、社会的スティグマを恐れて糖尿病であることを隠したり、治療を自己中断したりする「自己スティグマ」、医療者が糖尿病のある人を厳しい言葉でとがめる「乖離的スティグマ」などに分類され、それぞれがやむを得ない、問題ないこととして社会的に認識されてしまっている現状があり、糖尿病患者のQOLを低下させ、また糖尿病治療ならびに就労両立支援上の障害となっている。

この大きな流れのなか、国の働き方改革政策の一環として仕事と治療の両立を図ることをめざす動きと同期した形で、2022年4月の診療報酬改訂にて糖尿病での「療養・就労両立支援指導料」請求が認められ、糖尿病での職場との連携活動に対してはじめて診療報酬上の評価がなされた。背景としては、仕事と治療の両立に難渋している高齢糖尿病合併就労者の増加がある。

わが国における急速な高齢化はよく知られたところであり、同時に現役世代の人口割合の低下も生じている。この結果、就労人口と65歳以上の高齢者人口の割合が1：1に近づくと予想されており大きな課題となっている。年金財政の不足問題もあり定年年齢の引き上げなど、より長く仕事をしていただく政策方向であり、これは取りも直さず糖尿病などの疾患を抱えながら就労する患者が増えることを意味している。このような状況のなかで糖尿病を罹患している就労者がその治療に真摯に取り組むためには、就労と治療の両立が円滑におこなわれていることが必要となる。しかしながら両立支援の活動^{1)~3)}を進めていくうえで問題となったのは、先述のような職場における糖尿病に対する偏見（スティグマ）

である。当院では2021年夏～秋に職場に対する糖尿病イメージ・知識アンケート調査をおこなったところであり、その結果を示しながら問題点や対応について考えたい。

糖尿病での両立支援上の障害としてのスティグマ

職場との連携でしばしば障害となるのは、一般の方が糖尿病に対して「糖尿病は生活習慣病であって、本人の生活習慣の乱れの結果であり自己責任だ」と思われていることである。免疫異常である1型糖尿病も一括りとされ、また2型糖尿病の発症には遺伝素因が大きくかかわっていることは一般にはあまり認識されていない。このスティグマの問題は米国糖尿病学会では大きな問題として取り上げており、標準治療ガイドラインで「StigmaとAdvocacy」として一章を使って記載している。

2021年夏～秋に当院でおこなった職場に対する糖尿病アンケート調査（対象：産業保健スタッフ/一般従業員，n=1,069，未発表データ，表①）では、一般の職場において糖尿病患者に対して非常に強い先入観（イメージ）を有していたことが判明した。調査した日常習慣・外見・性格・仕事の能力のすべての項目で強いネガティブなイメージと糖尿病が結び付いていた。とくに「運動が嫌い」、「食べ過ぎ」、「太っている」、「自己管理ができない」、「意思が弱い」で高率であった。さらにこの傾向は20歳台の若年者でより高率であった。また産業保健スタッフと一般従業員との比較では、糖尿病の知識は産業保健スタッフがより有していたものの、糖尿病患者にもっているイメージには一般従業員と差異がまったく認められなかったことは驚きであった。したがって糖尿病の知識が多ければ糖尿病に対する偏見が少ないとはいえないことが明らかとなった。

表① 糖尿病イメージ調査（全対象，n=1,069）

	(%)	(n)
運動が嫌い	78%	829
食べ過ぎている人	71%	759
太った人	70%	752
自己管理ができない人	65%	697
意思が弱い人	45%	477
高齢者	38%	404
おおざっぱな人	35%	376
不真面目	28%	299
怠惰	28%	297
仕事のできない人	13%	143
陽気な人	11%	114
性格に問題がある人	10%	108
頼りない人	9%	101

いずれにしてもこのような否定的な先入観あるいは偏見は職場での無理解につながり、仕事と糖尿病治療の両立支援のうえで障害となる。極端な例ではインスリン自己注射療法中の1型糖尿病患者でも、失職や昇進の遅れなどを危惧して職場の上司や同僚に自身の罹患を隠していることがあり（自己スティグマ）、低血糖時の対応の遅れが生じたことも実際に経験している。このような状況では両立をめざした支援自体が困難で、支援活動と同時に啓発をおこなえないながら一般社会での認識を改善していくこと（患者の擁護；advocacy）も大変重要なことと思われる。今後の委員会の啓発活動が期待される。

職場の障壁を取り除く

職場へ働きかける前にまず医療者のもつ「乖離的スティグマ」を改善することが重要で、アンコン

会員限定コンテンツのため、med パス会員にご登録、
またはログインが必要になります。

